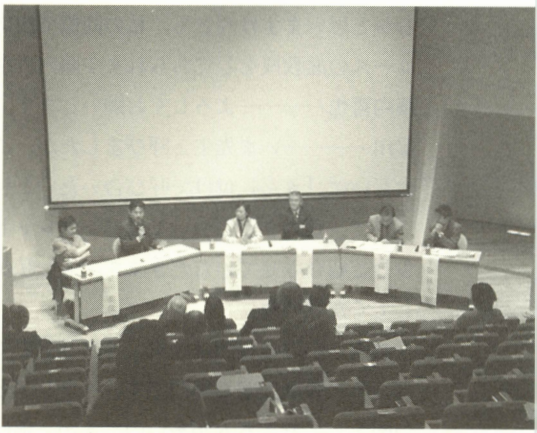
パネル・ディスカッション

〈文化力〉で地域を活性化する！

〈コーディネーター〉
梁川英俊　YANAGAWA Hidetoshi

〈パネリスト〉
原聖　HARA Kiyoshi
木部暢子　KIBE Nobuko
藤内哲也　TONAI Tetsuya
安藤剛　ANDO Takashi
平嶺林太郎　HIRAMINE Rintaro



梁川英俊————それでは時間になりましたので、早速パネル・ディスカッションを始めたいと思います。

講演の質問時間が終わって、ホールから出ていったきり戻ってこない方もいっぱいいらっしゃるようですけれど、私は個人的には今日のシンポでいちばん重要なのは、このパネル・ディスカッションだと思っております。もちろん、これは目の前にいる外国人講演者が、日本語がわからないから言えることでもありますが。すでに開始から5時間以上経っていて、シンポジウムというよりは、なんだかトライアスロンやサバイバルゲームに近いものになってきていますが、このディスカッ

ションは、ぜひ会場にいらっしゃる方にも積極的に議論に加わっていただきたいと思っています。質問、討論の時間もたくさんとりたいと思いますので、よろしくお願いします。

まずパネリストの皆さんをごく簡単に紹介させていただきます。詳しいプロフィールについてはお手元のパンフレットに記載されていますので、そちらをご覧ください。

まずいきなりですけども、ちょっと事情がありまして、パネリストを交代しました。つい先ほどまで司会に立たれていた方が私の隣におります。急にお願いして、いきなり最初に紹介するということで、たぶんご本人がいちばんびっくりされているかと思いますけれども、私の同僚で法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コースの准教授をしておられます藤内哲也先生です。

藤内哲也――――よろしくお願いします。

梁川――――いま先生と呼びましたが、これからはパネリストの皆さんについてはお互いに「さん」付けで呼び合いたいと思います。

さて、藤内さんについてはパンフレットにプロフィールがないので、私の方から少しご紹介させていただきます。もし私が間違えていたら、藤内さん、後ほど訂正してくださいね。

藤内さんのご専門は歴史、イタリア史で、それも中世から近世にかけての、特にベネチアの歴史がご専門です。イタリアというと、日本ではわりと均質な文化をもつ国として考える人が多いのですが、実はそうではないんですね。よくイタリア人が日本に来て、あまたあるイタリアン・レストランが皆イタリアの国旗を掲げているのを見て、「イタリアにはこんなにイタリアの国旗はない。どうして日本にいるときの方がイタリアの国旗を目にする機会が多いんだ?!」と驚くという話を聞きますが、イタリアというのはそのぐらい、国というよりは、むしろ地域の独自性が強いところで、国家としての統一性があまりない。自分の住んでいるところから30分も電車に乗ったら、もう街の雰囲気、地域の雰囲気が変わってくるというような、それほど文化的に多様な土地柄なわけです。ですので、そういう地域アイデンティティが大変に強い国の歴史を専門にしていらっしゃるという点で、藤内さんは、今日の話とも決して無縁ではないわけです。というわけで、たぶん、とてもおもしろい話が聞けると思います。飛び入りで大変かもしれませんが、まあ、むしろそうであるがゆえに、新鮮な視点から話していただけるかと期待しております。

ほかのメンバーは予定通りの方です。まず方言学がご専門の木部暢子さんです。

木部暢子———よろしくお願いします。

梁川———木部さんも、ついこのあいだまで鹿児島大学法文学部にいらして、藤内さんや私の同僚でした。現在は、国立国語研究所にいらっしゃいます。

それから、第一部の最初にケルトについて非常にコンパクトな説明をしてくださいました、ケルト学の原聖さん。

原聖———こんにちは。

梁川———次に、地域おこし関係の方を二人お呼びしています。お二人には後ほどプレゼンテーションをしていただきますが、たぶん最初の外国人の方の話に負けず劣らず、おもしろい話を聞かせていただけると思います。まず、大分県の豊後高田市で、「昭和の町」という地域おこしの活動をしていらっしゃいます建築家の安藤剛さん。

安藤剛———安藤です。よろしくお願いします。

梁川———それから甑島(こしき)でアートプロジェクトをやっていらして、大変評判で、よく鹿児島のメディアにも取り上げられていますが、平嶺林太郎さんです。

平嶺林太郎———よろしくお願いします。

梁川———はい、それではさっそく始めたいと思いますけど、まずは最初に第一部のお話を聞いて率直な感想を聞かせていただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

藤内———では、私から。

先ほどご紹介いただきましたように、午後になりまして急に出ろと言われましたので、この時間は本来ゆっくりと聞かせていただこうと思ってのんびり構えておりましたので、ちょっと焦っておりますが、なんとか務めを果たしたいというふうに思っております。

ケルトという地域について午前中から午後にかけまして5人の先生方の講演を聞きまして、大変おもしろかったんですけれども、梁川先生からご紹介していただきましたように、そのイタリアという国、日本では大変人気の高い、観光にせよ、文化にせよ、非常に人気が高い国ではあろうかと思います。いろいろなアンケートなどを見ましても、日本人がもっとも行きたい国のおそらくベストスリーのなかには入っているであろうと思われるんですね。

しかしながら、それは、ある意味では、イタリア人が思っているイメージとは

まったく違う。何よりもイタリア人というものは、国を単位として考えるということがほとんどないんです。よく言われるのはイタリアの国旗が出てきたり、あるいはイタリアという枠組みで物事を考えるのは、せいぜいサッカーのワールドカップかオリンピックぐらいではないかとよく言われるぐらいに、地域というところに対してアイデンティティを持っているというところが非常に強い。そういう意味では、今日のお話にありましたケルトのさまざまな地域は、国家ということに対するアイデンティティよりも、その地域に対するアイデンティティというものが非常に強い。また強いだけではなくて、むしろ中央から見れば遠くに離れていくような、そういう遠心力を持っているような、けれどもそれぞれの地域の真ん中にある海を中心に考えれば国を越えて、ボーダーを越えて結びついているような側面がある。そういうところを非常におもしろく感じました。

ヨーロッパの国々のなかには、そういう意味では、日本とはちょっと違って、国家という枠組みよりも、こうした地域という枠組み、あるいは国境線を越えた地域と地域の結びつきというものの方がむしろ強いのかなというようなイメージを強く持ちながら話を聞いておりました。

木部――――私はふだん、方言の記録、調査をやっていますが、最近は、いろんなところで方言の保存のことを訴えています。今日の午前中、先ほどまでのケルトの状況をうかがって感じたことですが、日本では、言葉の多様性を保存していかなければいけないということをいろんなところで訴えますと、「方言、何で残さなきゃいけないんですか」という反応が、実はあちらこちらで聞かれるんです。私が調査を始めたのは25年ぐらい前ですけれども、そのころは、尋ねていって、「ごめんください、方言を教えてください」というと、「こんなもの、聞いてどうするの」ということを言われることがありました。最近はさすがにそういうことはなくなって、「やっぱり方言は好きだよね」「方言はいいね」と皆さんおっしゃるんですが、では「お孫さんに方言を語って、お孫さんに方言を教えてください」と言うと、「それはね……」と言うわけです。方言で語ると孫がわからないから、返事をしてくれないから、孫の方に合わせてしまっているんです。しかし、孫と会話をするために共通語でおばあちゃんが話すんじゃなくて、おばあちゃん、おじいちゃんが方言でお孫さんに語ってほしいというんですけれども、「いやそれはね……」ということが最近は返ってくるわけです。

今日の午前中のお話を聞いていまして、どの講演者の方もやはり、まずはわかりやすい、見えるところですね、音楽だとか、あるいは文化のうちの有形、物が

あるもの、あるいは無形でも音楽だとか、ミュージシャンの話がたくさん出てきました。そういうところが、まずは訴えやすい。そこでたくさんの方に自分たちの文化ってこんなにいいんだということを知ってもらって、そして、でもやっぱり最後は言葉の教育までいかないと、やはり文化を守るというところまではいかないんじゃないか、ということを言っていらしたような気がします。

学校での教育ですとか、そういうところで言葉が教えられることになっていて、それが当たり前のようになっているということに、とても強く感銘を受けました。日本でも必ずそういうことができるはずですので、何とかそういう方向でやれないかなというふうにずっと考えていたところです。

原――――ケルト学の原です。先ほど、基本的な事項の紹介を私からしたわけですが、専門分野ですので、補足的なことについて二点だけ発言しておきます。

一つ目は、ケルト文化圏のどの地域の場合にも、音楽が盛んであるということです。音楽家がやはり多いわけですね。それなりの土壌があって音楽が盛んなのだと思います。

どういうところでそうした土壌がつくられてきているかというと、例えばブルターニュには、8月上旬に1週間にわたって開催されるインターケルティック・フェスティバルというのがあります。ケルト文化圏から音楽家たちが集まる音楽祭で、観光客が1週間で40万人も来るわけですが、参加する音楽家が6,000人もいるのです、1週間の間。そういう人たちがほとんどボランティアで演奏するわけです。そういう音楽家がいてこそ、いわゆるケルト文化圏の音楽、われわれが聞くような音楽が成立しているのです。そういう人たちはもちろんプロの人たちもいるし、セミプロもアマチュアもいます。

タンギ・ルアルンさんの話のなかで、フェスト・ノース（夜祭り）というのが出てきました。これは週末に行われる場合が多い、ローカルな伝統舞踊のお祭りです。ここでこうした音楽家が呼ばれて、踊りの伴奏をするわけです。そこでお金をもらって生活している人たちがブルターニュで数十人います。そういうところが基盤となってケルト文化圏の音楽というのが成立している。それは非常に重要な点だと思います。

もう一点、これはブルターニュとスコットランドに言えることですが、これについても、ブルターニュのルアルンさんと、スコットランドのロバート・ダンバーさんの話で、少し出てきました。ケルト語が話されているのは、スコットランドだと北のほうの半分の地域です。ブルターニュだと西側の半分です。ブルターニュの東

側の半分とスコットランドの南側はケルト語に属する言語ではなく、フランス語の方言と英語の方言が話されています。そこの地域にも、もちろん独自の文化があり、文化運動があります。方言文学とか、あるいは地域的な音楽もあるのですが、比較するとやはり、もう圧倒的といっていいと思いますが、ケルト文化圏の方が盛んなわけです。なぜかというと、それは違いが大きいのでわかりやすいということがあるのではないかと僕は思います。

二点、以上です。

安藤――後ほどまた「昭和の町」を紹介しながらお話を聞いていただきたいと思いますが、とりあえず今日の講演をお聞きしまして、故里でまちづくりを30年来ずっとやっているのですが、今日、この場に来て非常によかったと思うことがあります。

いよいよ良い時代の到来なのかなと、本日のシンポジウムで、いわゆる「都市の論理」というものが終わり、「地域の時代」の始まりなんだなと。先ほどお話がありましたが、パリとか東京とか、そういう大都市エリアの問題ではなくて、地球上におけるいろんな地域間の交流が始まるんだなと、そういう感じを強く受けました。

後ほどまたお話しをさせていただきたいと思います。

平嶺――アーティストの平嶺です。

僕が思ったのは、いろんなフェアとか写真、スライドでですけど、それらを見て、すごく華やかな印象があって、日本の国もそうですけど、もっと文化に力を入れてほしいなという率直な意見と、ふだんだとこういった講義はよく寝てしまうんですけど、今日はすごく目がさえて、非常におもしろかったです。

今、僕らも甑島という場所で地域プロジェクト、アートプロジェクトをやっているんですけれども、そういった日本の首都ではない、こういう鹿児島の場所でそういうアートプロジェクトというものもあるのですが、一方では大都市の東京でも都市とその郊外ということを考えて、新しい展開をしているアーティストの展覧会であったり、活動があって、そういったものも何か少しずつ日本も変わっていってるのかなという実感があるので、すごく励まされて、今日はいいお話ができたらいいなと思います。

梁川――どうもありがとうございました。

さて、皆さんいろいろとお話ししたいことはあるとは思いますが、続きはまた後でということで、さっそくですけれども、先ほど第一部でケルトの方々から地域文

化振興のお話をいろいろと聞きましたので、今度はそのお礼にというかお返しにというか、日本でもこんなに面白いことをやっているんだよということで、平嶺さんと安藤さんからそれぞれ20分ぐらい、ご自身の活動についてご報告をいただきたいと思います。

それでは、平嶺さんからよろしくお願いします。

KOSHIKI ART PROJECT について

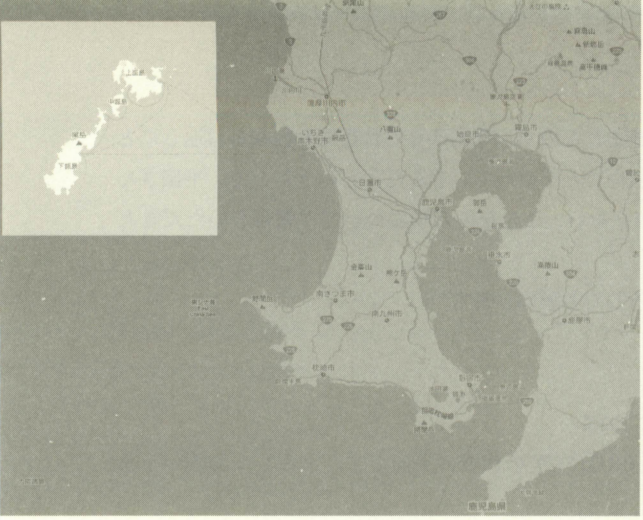
平嶺———KOSHIKI ART PROJECT の代表の平嶺です。よろしくお願いします。

このKOSHIKI ART PROJECTは2004年から活動をしていて、現代アートの展覧会、景観デザイン、音楽祭の3つを中心に活動しています。そのほかにもいくつかの企画を実験的に行います。

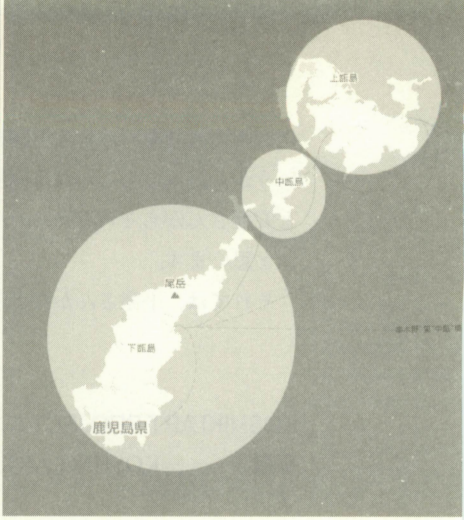
まず、このKOSHIKI ART PROJECTのKOSHIKIというのは、甑島の「こしき」からプロジェクト名をつけました。甑島は、いちき串木野市からフェリーで1時間ほどの場所に位置しています（写真01）。この甑島は島といっても3つの列島になっていて、上甑島、中甑島、下甑島とそれぞれ特有の文化、言葉、風習があります（写真02）。ちょうどこの丸い位置が集落の位置になっております（写真03）。KOSHIKI ART PROJECTの今までの活動はこの上甑と中甑、この2つの島を舞台に活動をしてきました。下甑の集落はこのような分布になります（写真04）。

まず最初に、この2004年にどういった経緯で展覧会を開催したかというと、僕が大学2年の2003年にいろんな地域を舞台としたアートプロジェクトや、廃校を使った展覧会を見て、アートが美術館やギャラリーといった白い空間ではない場所で発表しているのを見た経験から、故郷の甑島でも出来るのではないかと思い始めました。甑島も、過疎や、高齢化の影響もあって、空き家、空き地が多くあり、利用できる空間がたくさんありました。こうした現象を見てきているので、アーティストが空き家に滞在して、制作・発表するようなプランを考えていきました。

甑島の里町は、陸繋砂州といって、島と島の間に波の作用で砂や石が堆積してできた、島と島をつなぐような地形になっています（写真05）。この地球が生み出した芸術作品の場所が、何か人間と人間が交流できるような、そういう場所になっていってくれたらいいなと思って、自分にできることがたまたま現代アートだったので、現代アートの展覧会を企画していくことになります。



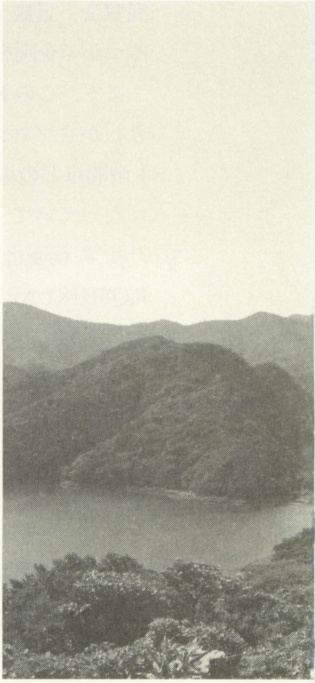
01



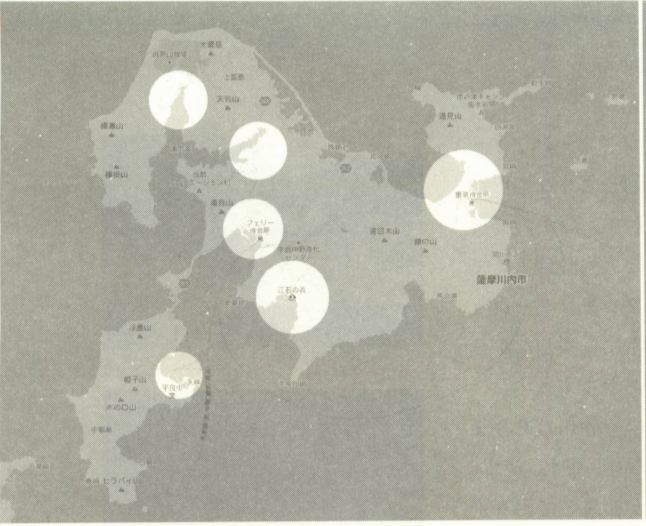
02

05

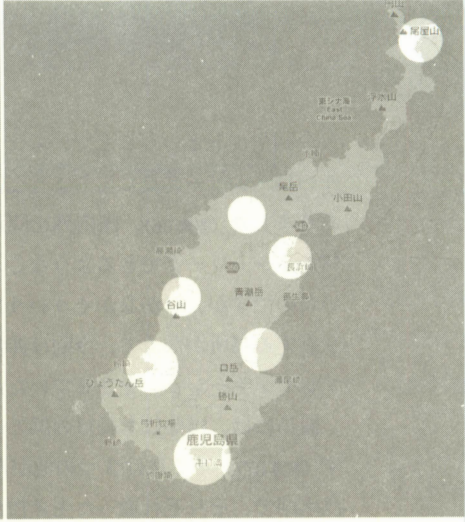
06



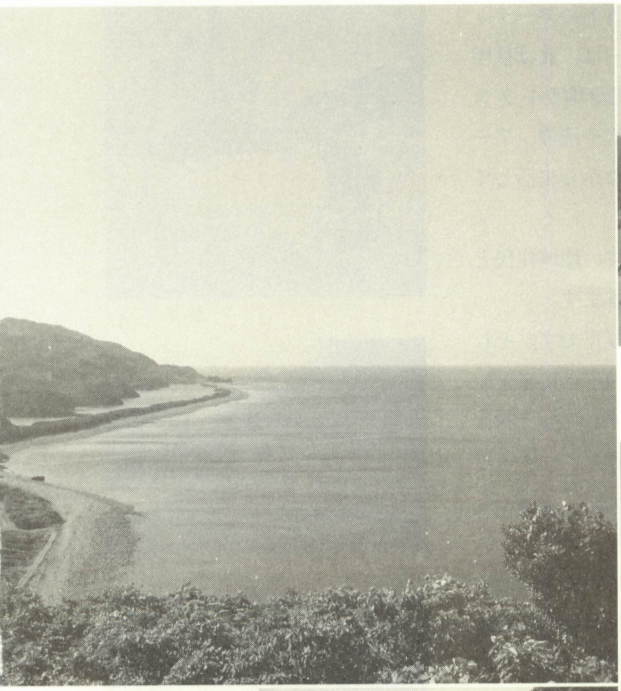
07



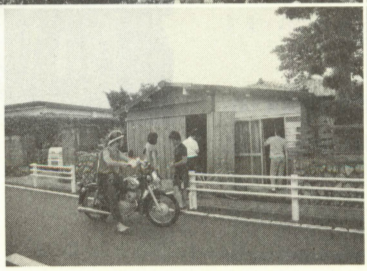
03



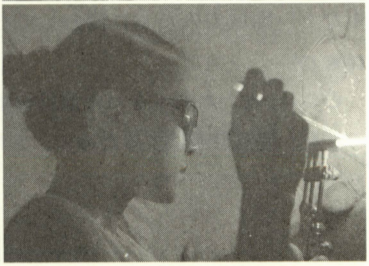
04



08



9



10 11

今回ケルトということで、ちょうどコーンウォールの島、シリー諸島にもちょうど同じような地形がありました（写真06）。国内外を問わず、ほかの島と何かネットワークできるようなことも当時は考えていたのですが、なかなかそういうプレゼンテーションをする場所がなくて、今回は非常に緊張しながらプレゼンテーションをさせていただきます。

甑島には、ほかにも長目の浜という砂州もあります（写真07）。そこには3つの池があり、海水、淡水、汽水湖で、それぞれ違った生き物が棲息しております。

これは2004年の初めて集まった15名のアーティストです（写真08）。この時のメンバーは、北は秋田から南は鹿児島まで、いろいろな出身地からメンバーを集めて展開していきます。自炊や洗濯、アーティストは共同で空き家をシェアしながら生活していきます（写真09）。

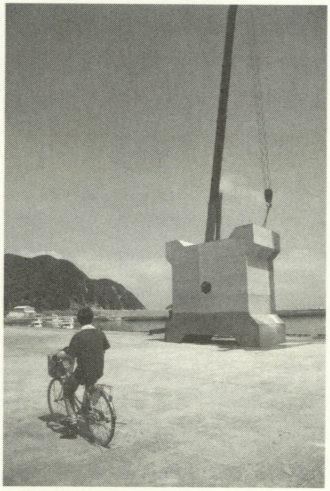
集落の空き家を借りることによって、地域住民とのコミュニケーションが生まれていきます。

これはアーティストの制作現場の写真です。それぞれの制作現場を、近所の人たちがのぞきに来ます（写真10）。アーティストは各自の素材を使って制作をしていきます。これは、ガラスをガスバーナーなどを使って溶かしながら制作しています（写真11）。島の人たちは珍しそうに覗いてみたり、アーティストの体調をうかがったりして見守っています。

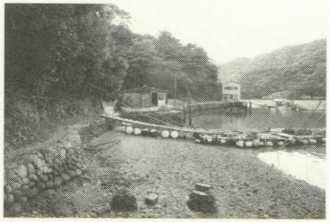
これは中庭を提供してもらって、巨大な木の立体を制作しています（写真12）。移動などは、クレーン車など、地域の人たちに協力してもらっています（写真13）。

ここは、使われなくなった漁具倉庫です（写真14）。ここを、展覧会場にするために、きれいにしている

12



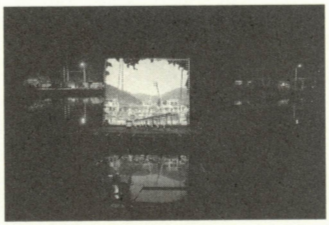
13



14

15

16



17

18

19

のは、島出身の大学生たちです（写真15）。島には高校、大学がないのですが、こうして夏休みの期間にアーティストの手伝いにきてくれています。

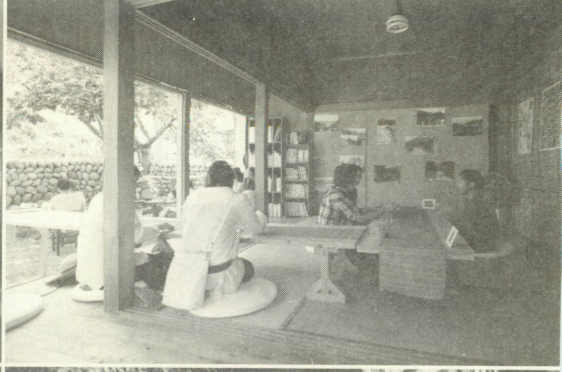
これは、いかだの上でパフォーマンスをするための装置を制作しています（写真16）。この作品では漁師さんたちに手伝ってもらって、いかだが潮の満ち引きでパフォーマンスがうまくできるように、いろんな工夫を凝らしてできた作品になります（写真17）。

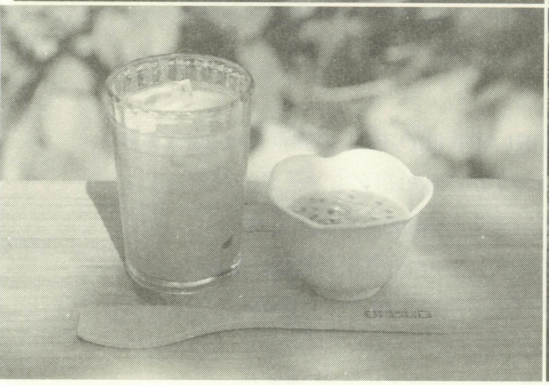
KOSHIKI ART PROJECTの展覧会は20代の若手が中心ですが、私の祖父もアーティストとして参加しています（写真18）。もともと趣味で、毎年、干支などをつくるのが好きでしたが、毎年アーティストが制作をするのを観て、より表現に力が入るようになりました。今は本当にさまざまなものをつくるようになってきています（写真19）。

これは、会場で食べることのできる、きびなご丼です（写真20）。里集落の飲食店が、それぞれのお店で工夫して、期間中限定で食べることができます。ここ3年ぐらい、こういった活動も地域で起こってきて、展覧会を盛り上げてもらっています。

これは空き家をリノベーションして、甑島の昔の写真展とカフェを開きました（写真21）。島の人や島を訪れた人がゆっくり休めるような場所、自然に人々が交流できる場所を実験的につくりました。島のパッションフルーツをスイーツにしてみたり、メニューは少ないですが、島で育ったもので出来ているので非常に好評で、夏だけでなく年中やってくれたらという意見も多くありました。カフェでは、ほかにも島で採れた米や、紫蘇ジュースなども販売さていました（写真22）。

ここでは、近所のおばちゃんや、島出身の高校生





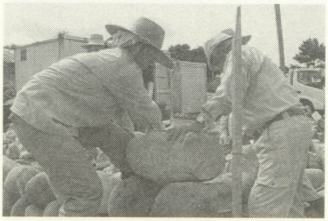
20　21

22　23

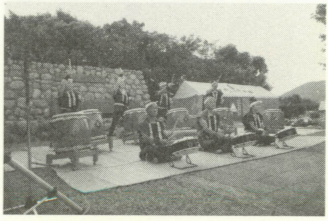
たちがメニューを書いてくれたり、カフェの運営を手伝ってくれたりしています。夜はトークショーなどを開催したりしています（写真23）。トークショーの背景に見える石垣は昨年の「玉石プロジェクト」で、島の人と京都造形芸術大学の学生が手がけました（写真24）。

これは音楽祭です（写真25）。島の伝統芸能や島外からミュージシャンなどを招いて開催しています（写真26）。毎年この場所で行われていた慰霊祭がなくなったことによって、この場所で新しいコミュニティのあり方を模索するというような展開で、こういった音楽祭を開催しています（写真27）。

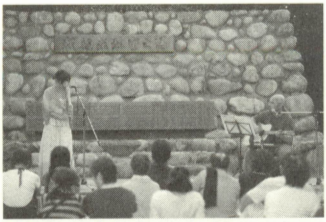
これで一応KOSHIKI ART PROJECTのプレゼ



24



25



26

27

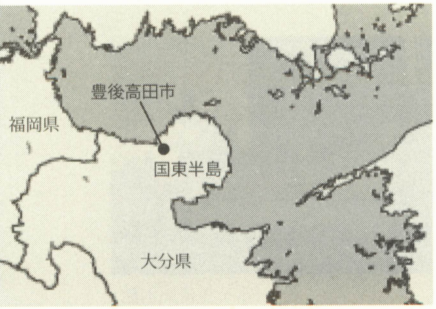
ンテーションを終わらせていただきます。

「昭和の町」について

安藤――――続きまして、安藤がプレゼンをさせていただきます。後ほどちょっとDVDを流していただきまして、風景なり見ていただきたいと思います。私はアナログ人間で、ほとんどこういう機械物が苦手で、すべて梁川先生に今回お願いをしてしまったという経緯がございまして、基本的には、前半はしゃべりのほうで、後半ちょっと「昭和の町」のDVDを見ていただきながらプレゼンを進めていきたいと思います。

私は、昭和23年生まれ、戦後直後のいわゆる団塊世代の人間です。建築設計事務所を営みながら、大学で教鞭をとりながら、故里のまちづくりをもう30年来やっております。

私の生まれた豊後高田市、地図が後ほど出ると思いますが、この鹿児島のちょうど真北側にあるのですが、北九州、福岡から大阪のほうに近い瀬戸内海の半島でございます。甑島と対照的に、瀬戸内海に面した内海地域で、九州といえども最東端の辺境地域という意味で、まさに今回のシンポの流れからすると非常にわれわれも似通った環境のなかで議論ができると思います。



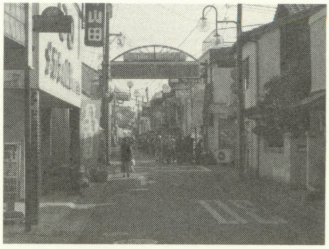
出てきましたね。これが国東半島です。宇佐神宮の、その東5キロメートルの位置に豊後高田市があります。この国東半島はもっと大きな地図があったらよかったんですが、実は関西のほうから見ますと、瀬戸内海上、国の先ということで「くにさき」というふうに呼ばれた説と、それからここより西に位置する宇佐神宮、歴史的に古く、「邪馬台国」で

はなかったかといわれているエリアなんですが、日本全国の八幡宮社の総本山でございます。この宇佐神宮から見た東で、国の東で「くにさき」、「くにざき」というふうにいわれている説もございます。

豊後高田は2万5,000人の人口の町でして、現在、年間35万人の観光客が訪れています。10年前は基本的にはゼロでした。宇佐神宮とか、富貴寺という国宝級のものを訪れる方は何万人かいましたが、実はこの町を訪れる方はゼロでした。そういう町に10年前「昭和の町」が誕生して、現在に至っております。

この豊後高田市、地形的に見まして、九州のいわゆる瀬戸内海沿いの一番いい港町ということで、実は江戸時代、300年間の間、長崎の島原のいわゆる植民地だったわけです。明治まで続くその植民地時代を経て、今の実は豊後高田のアイデンティティといいますか、内向的な時代が300年続くわけですが、内向性は島原から開放されてなお、この昭和の初期まで続いてきたということで、いわば辺境の地における非常に偏狭な時代を永々と続けてきたわけです。明治時代、やっと島原から解放されまして、商業の町として一応発展はしたのですが、その後、モータリゼーションによって、昭和40年代から商店街が、全国で崩壊していく。ご多分に洩れず、豊後高田市も衰退していくということになるわけです。

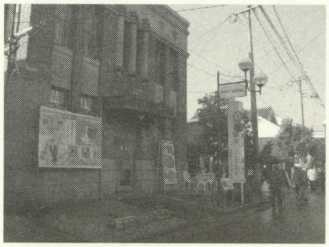
昭和50年代に入りまして、私も含めてですが、数人のまちづくりのメンバーがUターン、あるいは志を持ってという方もいますが、ふるさとに帰ってきまして、歴史家とか宗教家、私みたいに建築家、あるいは商人の方たちも含めて五、六人でつくったまちづくり運動が、「テンプランド運動」と



「昭和の町」の入り口

雑貨店

洋服店


「ホテル清照別館」

左上：「昆虫の館」　右上：薬局
左下：餅店　右下：「蜂捕屋」

いう名前で発足します。30年前の話です。テンプランド、テンプルランドですね、いわゆる「寺院のある、心和む里」という意味で命名しまして、さまざまなイベントを仕掛けてきました。

ここにおられる原先生からも認めていただいているのですが、「大分方言丸出し弁論大会」というのがございまして、もうこれ28回を迎えております。これは地方における文化、方言の文化のいわゆる内的振興といいますか、ふるさとで同じ方言を使いながら仲よくしていこうよと、非常に温かい感じの方言大会でございまして、来年が29年目、もうそろそろ30回を迎えるときになっております。

それから、秋の大祭でございまして、豊後高田の

町の真ん中に桂川というのがございますが、寒中この川をはだかの若者たちが、みこしを担いで渡る行事がございます。これは1,200年続いております。藤原時代から続いている祭りです。この祭りをグレードアップしようと、28年前になりますが、テンプランド運動の一環として、世界一の大松明をつくろうということで、重さ4.5トン、長さにすれば18メートルという大きな松明を、そのみこしの脇に添えて、火矢でもってそれを燃やすというイベント「大松明秋祭り」を始めました。

いわゆるこのテンプランド運動によって、内的運動も高まってくるのですが、閉鎖的な、内向的な状況は辺境地域であるがゆえ、なお続くわけですが、それを打破すべく、みんなであっちこっちに飛びまして、全国レベル、世界レベルで八十数カ所の現地視察などを行ってまいりました。私はどちらかというと学生を連れての外国旅行が多かったのですが、特に私が気に入った町がありました。東欧のブダペストのドナウ川河畔にセンテンドレというきれいな小さな町ございまして、数日滞在し、「ここだな」とひらいめいたのです。この町も古くから古い町並みがあったのですが、なかなか文化振興できない、あるいは産業が興らないということで衰退していくのですが、東西の壁が崩れて数年で、観光客数が230万人ぐらいにふくれ上ったという話を聞いたのです。どこにそういう魅力があるのかなと思ってお聞きしたところ、もともと建物にいろんなペイントとか看板が張られたのを、そういった装飾物を取り除いてしまうと、200年前、250年前の古い町並みがあらわれた、それが街の魅力となって復活したということを聞きました。高田に帰ってきて、メンバーと一緒に「昭和の町」を江戸までさかのぼっ

「カフェ・バー」

大衆食堂

電気店

金物店

お好み焼き店

映画館「昭和座」

寝具店

薬局

て、新しい町に修景してしまおうと。新しい町に修景といったら非常におかしな話なんですが、簡単なことで、建物の軒先の看板、――パラペットというんですけど――、そういった物を取り除いてしまおうという運動をやったわけです。そうすると大正時代、それから明治時代、江戸時代の古い、すばらしい建物がそこに出現したのです。

平成4年から23年まで、約60件の昭和の商店建築が再生して今現在に至っていますが、なかには昭和のおもちゃ博物館、それから絵本博物館とか食堂館、さまざまな物がいわゆる新築ではなくて「修景」、つまり「景色を修理する」という意味ですが、建築を改修して、元の姿に戻す。何も足さない、何も引かない。そういう原点に立ち返って、200件の建物を原寸計算し、修景図面をつくり上げて、一軒一軒説得しながら修景工事を行って、現在に至っております。

これから「昭和の町」がどういうスタンスで、どういった方向を目指していくのか、これが非常に重要なことでして、昭和ブームというものが終わればもうおしまいではないかというご意見もございますが、私たちとしては、やっぱり継承していくということが大事だと思っています。今、市役所あるいは商店街の若い方たちに非常にやる気が起こってきておりまして、持続可能な街づくり運動をと彼らと議論を続けております。

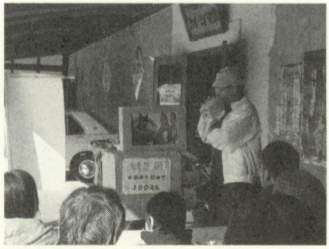
先ほど午前中からご講演いただきましたヨーロッパのすばらしい地方文化、そうしたものを参考にしながら、これからの「地方における文化の振興」というものは、東京とかパリとかロンドン、例えばそういう国や首都の枠を乗り越えて、地域の文化環境の再生、そういったものに取り組んで、人々が住み

たいと思わせる町をつくる。地方独自の魅力というコンテンツを広く世界の地域に発信していく。例えばブルターニュと大分の国東というような、地球の裏側の地域との直接的な交流をすることでお互いに刺激を受け、さまざまアイデンティティが再起動あるいは新生することができるのではないでしょうか。自己あるいは地域の再形成を目指して、ジェネレーションを越えて若い人たちとの共働・共生をいっそう仕掛けていきたいと思っています。

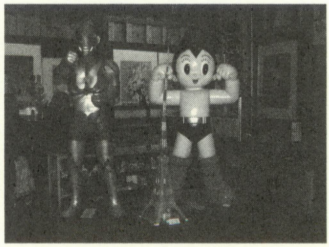
後でまたご議論をいただきたいと思いますので、早目に終わりたいと思いますが、最後に今感じていることを少し述べたいと思います。この稲盛会館の設計は、ご存知の方も多いと思いますが、安藤忠雄さん――私は安藤剛ですが――、世界的に有名な安藤忠雄さんです。この形や利便性、いろいろ賛否両論あるかと思いますが、今日のこのシンポジウム、非日常的な空間に居りまして、私は非常な高揚感と不思議な安らぎといいますか、それを覚えて、何かこう卵の中で安らいでいると、そういう感じがいたします。これから私もまだまだ力強く頑張るためにも、今日この卵の中から新たに巣立っていきたいと考えております。

鹿児島の皆さん、鹿児島大学の学生の皆さん、期待しております。ゲストの皆さん、ありがとうございました。

「昭和の夢町三丁目館」


「昭和の夢町三丁目館」前の紙芝居

「昭和の夢町三丁目館」のコレクション


ウルトラマンと鉄腕アトム

「町おこし」の苦労

梁川――――どうもありがとうございました。

さて、お二人に発表していただいたので、早速パネリストの皆さんにいろいろ発言していただきたいのですが。できれば、私が何も言わないうちにいろ

んな方がいろんなことを話してくださるという状況が一番望ましいのですけれども、いかがでしょうか。急に聞かれても困りますかね。

では、平嶺さんと安藤さんのプロジェクトの両方を実際に見たことのあるのは、もしかしたらこのパネリストのなかでは私だけかもしれないので、まず責任をとって私から発言したいと思います。お聞きしたいのは、安藤さんは今いろいろと「昭和の町」を立ち上げるときのお話をしてくださったのですが、平嶺さんはその辺はかなり短く切り上げて、おもにアートフェスティバルそのものの話をしてくださったわけですが、立ち上げるときの話というのも少し聞かせていただきたいのですが。いかがでしょうか。

平嶺――――ちょうど二十歳のときに開催するんですけど、東京での自分の作品に満足できなくて、当時、島の方言をひたすら書き続けたり、島のものをモチーフに絵を描いていました。そのときに、正直なところ、表現がリアルに思えないというか、作品が発展していきませんでした。それに、作品を発表する場所が、公募展やギャラリーで1週間何十万も払って発表するというのが、学生にはすごい負担でもあったので、自分で自分の発表する場所をつくろうと思ったのがきっかけです。周りの学生たちも、すごく発表する場所を求めていて、別にギャラリーではなくても、作品をつくって発表できるのであればどこでもいいということだったので、甑島には滞在・制作の場所があって、自然の芸術もいっぱいある場所でやってみないかと言ったところ、みんなが賛同して始まりました。

その後、実家の家族にプロジェクトをやることを伝えると、両親も祖父母も大反対で、できないと思ってたんですけど、うちの姉や弟が応援してくれて、今では親戚や鹿児島市内の若い人たち、いろんな人たちの協力を得て、今に至っています。

スタッフやボランティアも合わせて60名ほど、鹿児島を中心に全国にいます。

梁川――――私が甑島のアートプロジェクトに行ったのは一昨年でして、実は甑島に行ったのもそのときが初めてでした。私は鹿児島に来てかれこれ20数年になるんですけれども、もちろん甑島の存在自体はずっと知っていて、行きたいとは思っていたんですが、どうもなかなかチャンスが、というか理由がなかったんですね。それがたまたまある居酒屋に行ったら、甑アートプロジェクトのチラシが置いてあって、それでこういうものがあるのなら行ってみようと思ったわけです。そのときには、こうして平嶺さんをお呼びすることになるとは、もちろんまったく思っていなかったんですが。

で、私が実際にプロジェクトに行ってみて思ったのは、なんと言うんだろう、何

か古層を掘り起こすというんですか、昔のもの、方言というものももちろんそうですけど、そういう、それまで自分たちでは気づかなかった島の古層を掘り起こす活動と、プロジェクトがつながっているような印象を受けました。おそらくアートプロジェクトをやろうと思ったときにはそういうことは考えていなくて、やっているうちに、先ほどおっしゃった、おじいさん、おばあさんの戦争体験とか方言とか含めて、そういう島の古層というか、古いものを掘り起こす活動につながっていったような印象を私はもったんですけれども、そのあたりいかがですか。

平嶺———はじめは島の素材や、島の文化をキーワードに活動を展開していましたが、制作期間が短いことや、素材やコンセプトが島の人たちの営みに近すぎて、心を動かすのが難しかったです。5年目ぐらいから、アーティストのコンセプトで展開することによって、島では感じることのできないアーティストの感覚が島の人たちとのギャップをつくり、島民が自分たちのアイデンティティを実感出来ていくような感触がありました。なので、かえって島をテーマにとかではなくて、その、やっぱり、新しい芸術として現代アートを提供していく方が、非常に島の人たちのエネルギーを沸き上がらせることが出来るような気がします。

梁川———なるほど。で、もう少し質問を続けさせてください。

今のお話は、外から来た人が、地元の人があまり気づかなかったようなものを見つけてくれて、それで逆に地元の人の方がまた新たな目でそうしたものを見直す、もう一度新らしくそうしたものの存在に気づくというような話にも聞こえたんですけれども、例えば、「玉石プロジェクト」では、そういう、昔つくっていたけど今はつくらなくなった丸い石の塀の価値とかを、おそらくこのプロジェクトをきっかけとして、外から来た人の眼差しを通して、もう一度土地の人も見直すようになって、今度はそれを外から来た人と一緒になってつくっていくというような動きがあるのかなと私は考えたのですけれども。いかがでしょうか？

平嶺———石垣に関しては、2007年の展覧会のアーティストが海岸の波打ち際で玉石を使って、丸い円錐の作品をつくたんです。円錐にするためには難しいテクニックが要るものですから、そういった技術を島の人に、特におじいちゃんに聞いて積んでいきました。結構頑丈そうに見えて、以外にもちょっとした波でもすぐ崩れてしまうんです。それを周りの人たちが見ていて、アーティストではなくて、その地域の人が夢中で勝手にその石積みの作品を積み直したりしていきました。その流れもあって景観デザインを専門にしている副代表の山下賢太が、もともとあった島の景観を取り戻していくと同時に、島の景観によるコミュニティの再生に翌年か

ら本格的に取り組み始めました。

木部――――お二人の発表を聞いていて思ったのは、地域の文化を残そうとか、地域の文化を使って地域おこしをやろうというときに、普通は例えば古い文化を守るという発想にどうしてもいっちゃうんですね。各県に文化財保護条例というのがありまして、その上には国の文化財保護法というのがあるんですけれども、そういうのに従って行政の文化保護がやられているわけですが、それはどうしても、古い文化をそのまま残すという発想なんです。やっぱり、それではだめなんです。古い物を残すのはもちろん大事です。それらは歴史的にも文化的にも価値があって、それはそれで大事な活動ですが、それで地域の復興をやろうとすると、どうしても観光客を呼ぼうとか、そこで終わってしまうわけです。

お二人の活動を見ていて、そうではなくて、すごくクリエイティブなんですね。古いものというか、地域の生活をベースにしながら、そこで新しい文化や芸術をクリエイトしていく、それで地域の人も、「あ、そうなんだ、自分たちの地域ってこんな文化があったんだ」という古い記憶を呼び起こして、地域に住んでいる人もそれをベースにしてクリエイティブになっていくという気がしたんですね。安藤さんの景観の問題も、これは看板を外すことによって昭和に戻すということでした。いわゆる文化財、例えば大分ですと石仏ですとか、本当に古い文化、国の文化財に指定されているお寺、テンプルとおっしゃっていましたけど、たくさんあるんですけれども、そこをベースにすると、やっぱりどうしても昔の物を見てもらうという、観光客を呼ぶということで終わってしまうのです。そうではなくて、住んでいる人が住んでいる人の生活感覚で、もう一回、町をつくりなおしていこうというところに根差した地域おこしという点で、非常に発展的だなという気がしました。

原――――平嶺さんの指摘された、お金をかけないでやるという発想は、これはブルターニュでも同じで、先ほど音楽家が何千人も集まるという話をしましたが、そういう人たちの交通費をひとりひとり全部出したら大変なお金がかかるわけです。でも、交通費などは出してくれません。みんな自費で参加します。宿舎と食事は用意してくれる。何千人分にもなりますが、それくらいです。10年ほど前になりますが、このインターケルティック・フェスティバルに、東京からバグパイプのバンドが参加したことがあります。それも自費で行っています。こうしてみんなが手弁当で集まる、そういう発想がまず僕は非常に大事だと思います。

藤内――――ヨーロッパのさまざまな都市の景観というものは、非常に個性的だというような言い方がよくされます。それに対して日本は、とりわけ戦後、どこの町

に行ってものっぺらぼうになってしまって、どこの町かわからなくなってしまったというようなことがよく言われる。

ところが、安藤さんの先ほどの取り組みを見ておりますと、確かに昭和のある時期というのは、ああいう町並みは日本全国おそらくあって、それ自体は決して独自性を持っているわけではないはずなんです。

ところが、先ほどの木部さんのお話ともつながると思うのですが、それを少し戻してみる、そして本来たくさんあったはずのものが、今ほとんどの地域で変わっている、それを少し時間を戻してみて本来の姿を取り戻すことによって、逆に独自性が出てきている、あるいはその町の魅力になっているというところが非常におもしろいなと思いながら拝見しました。

実際にあの町並みを見て、豊後高田だということがわかるわけではないんだけれども、それはそれで一つの大きな魅力になっているというところが非常におもしろいところなのかなと思いながら拝見しておりました。

梁川――――ありがとうございました。

安藤さん、今の木部さんや藤内さんのご意見については、いかがでしょうか。

安藤――――今の、木部先生からご指摘がありました、ご指摘というよりも、たぶん僕も共通しているのですが、町というものは、やはり「住む人のために、住む人がつくる」というのが原点だろうと思っております。観光客を目当てに「昭和の町」を発想したというところは、実はわれわれのなかにはなかったんです。結果的にゼロから35万人になったという経緯がございますが、これは想定外の結果でしかありません。ビジターと定住者の交流という、聞こえはいいのですが、そういったことによっていろんな感性を磨きあげるとか、逆に相手の町を訪れてみようとかいう、そういった交流システムが生まれてくるということが大切ではないでしょうか。魅力のある町は自分たちでつくらなければ、あるいは魅力のある町でなければ自分たちは住めないというぐらいに考えて、そこの町の商人たちが本気で商店を守らなければいけないと思います。300年来の島原の領地として、この商店街が持続してきたという経緯をどう考えるか。島原からの呪縛を早く脱して、商店街というものよりも商店という「個店」の魅力を大事にして、つくり出していかねばならないと、今60店舗が頑張っているという状況です。

そういったもののなかで、先ほど午前中に紹介されたいろんな町々のなかに、いろんなヒントがあるのだろうと思って、今後また訪れてみたいな、そういったものが地域同士の相互交流につながるのだろうと思っています。

梁川――――ありがとうございました。

私は今ちょっと、お二人のプレゼンテーションの時間が短かったなと反省してるんです。特に「昭和の町」の方は、もしかしたら会場にいらっしゃる方は、どんなものなのか正体がよくわからなかったかもしれないという気がしています。本当はもっともっと面白いんですけど、その辺がちゃんと伝わったか不安なのですけれど。ビデオだけではなく、もっと写真なども上手に使って、ポイントを絞ってお見せすればよかったと少し反省しています。でも空間的な広がりのあるものを平面で説明するというのは、そもそも難しいのですよね。先ほどご覧に入れた町並みというのは、あれはもう本当に表面で、ごく一部ですね。でも全体について説明すれば、それだけでもう1時間、2時間くらいはすぐに経ってしまいますから。安藤さんも奥床しい方ですから、あまり自分から大声で宣伝されるということはなさいませんでしたし。そういうわけで、皆さんに具体的なイメージをもっていただけたかが少し心配です。えーと、そろそろケルトの方々が何か言いたくてうずうずしていらっしゃるみたいで、少しそちらにマイクを渡しましょうか。

方言と言語、そして地方の可能性

ダヴィス・ヒックス――――方言の問題に関して、いくつか指摘したいと思います。

まず、みんなが同じしゃべり方をするなどとんでもないことで、ヨーロッパでは言語的多様性は、当前のことであり、豊かさであると見なされています。現在ではヨーロッパの法律によって保障されているものです。

次に、方言は豊かさであり、方言を持つというのは言語にとって健康的なことであり、日本語でも同様のはずです。

三つ目に、一つの方言に統一するというのは馬鹿げています。一種類だけの木では、森は出来ません。若者は地元の文化と切り離されてしまい、地元の文化を尊重しなくなり、その土地を離れて出て行ってしまうことになります。

ヨーロッパでは、ほとんどの国には、標準語となる言葉があって、たとえばドイツでは高地ドイツ語方言、イタリアではフローレンス方言、英国では南東部イングランドの方言、フランスではパリの方言がそれぞれ標準語となっています。これは国家成立のプロセスでそうなったわけです。しかし私たちがすべきことは、すべての方言をそれぞれ平等に教え、それぞれの方言を豊かにし、人々が地元の文化との

絆を失わないようにすることかもしれません。

そして最後に、人は、地元方言で行われる文化的なイベントなど、オーセンティックな地元文化にこそ心惹かれるものだということを指摘したいと思います。その波及効果として、英国では、最近では標準的な南東部方言よりも地方訛りの方が信頼出来ると見なされており、これは地域の活性化にも繋がります。人々の地元の文化に対する自信を高め、それがより多くの社会資本につながるわけです。

梁川――たぶん、途中でやめさせてひどいやつだと思うでしょうけれど、これこのままいったら延々としゃべるんです、彼は。これはもう最初の講演をお聞きになったときからおわかりだったと思いますけど、やっぱり「言葉」の問題というのはかなり大きくて、やっぱりそれが彼らにとっては核となっているんですね。それがですね、彼らの話に対してわれわれが抱く違和感というんですかね、そういうのにつながっていると思うんです。

私は最初の趣旨説明のときに、鹿児島とケルトには「辺境」、すなわち西の端という共通性があるけれども、そうした類似をもちながら、両者はやはり異なっている、その相違にも注目したいという発言をしました。それで、その相違のなかでもっとも大きいと思うのは、この「言葉」の問題なんですね。私は一応、専門家とは言いませんけれども、もちろんヨーロッパの言語事情に関しては、たぶん普通の日本人に比べて関心はあるし、それに多少なりとも詳しいはずなんです。それでも、やはり正直に申し上げてこの問題には違和感がとれないです。まあ、原さんはどうかわかりませんけれど。とにかく、私はとても違和感があります。これは、たとえば日本で言えば方言を守るとかいう運動を連想するかもしれないんですけど、そういうものとは少し違うのですね。実はこのシンポのために安藤さんにいろいろケルトの資料をお送りして、「予習しておいてください」といって読んでもらったのですけど、「いかがでしたか？」と訊いて最初にかえってきた答えが、「日本人はあそこまでヒステリックにならんでしょう」みたいなことだったのですね。あ、これケルトの方には訳さないでくださいね。まあ訳さなくても半分おわかりかもしれませんが。

要するに、日本の方言、たとえば鹿児島方言を守るなどというのは、それに比べればずっと微笑ましい話なので、ヨーロッパの場合、特にこのケルトの場合は、われわれから見れば「そこまで必死になってやりますか」みたいな印象は拭えないんです。少なくとも私は、先にも申し上げたように、すごく違和感がある。もちろん人によっては、「そういう点は日本や鹿児島も学ぶべきだ」と考える方もいらっ

しゃるかもしれないんですけども。すみません、なかなか皆さん発言してくださらないので、一人でしゃべっていますが。もう少し続けさせてください。間違えたことを言ったら、後でいろいろ反論していただきたいんですけど。

例えばケルトは、沖縄みたいなところとはすごく相性がいいんですよね。沖縄、それから奄美ですね。こういった地域とは、しっくりとくるところがある。鹿児島の場合は、やっぱりどうしても違和感があるのですね、鹿児島だけではなく、先ほどから言っているように、日本の大方の地域がだいたいそうだと思うのですが、特に言語の問題ではケルトとはどうしてもそぐわないところがある。沖縄は辛うじて重なるかなという感じはありますけれども。では具体的に何がそぐわないかということになりますが、それはやはり「政治」だと思うんですよね。言語の問題にプラスされた政治の問題。普通の日本人の感覚としては、地域の「言葉」の問題に政治がプラスされてくるという感覚というのは、なかなかよくわからないんですよね。ですから、ケルトの場合は、日本で言う「方言」の問題ではない。講演のなかで皆さんがしきりに言っていたように、「言語」の問題なのですよね。では「言語」と「方言」とは何が違うかというと、それはやはり間に政治が介入するか否かということだと思うんです。つまり「方言」が「言語」になるためには、政治というファクターが不可欠である。政治こそが方言と言語の境界にあるものだ、ということになると思います。

少し極端な例ですが、ある地域が、それが属する国家から独立するという場合を考えてみます。そういう独立運動みたいなものが起こると、その地域の言葉は「方言」ではなく「言語」に化ける。そして、たとえば将来の「国語」というものを目指して、文法書ができ、辞書ができ、学校ができ、何ができというそういうプロセスを辿る。あ、あと印刷物ですね。そういうものが必要になるわけです。印刷物といえば、ケルトの人たちの言語はみんな書き言葉を持っています。でも日本の「方言」には書き言葉なんていうものはない。どんなに方言がきつい人たちでも、文章を書く段になると「私は、昨日、お父さんと……」いう調子になってしまう。ふだんはそんな話し方なんてしていないのにね。ですから、書き言葉を持たないというのが、日本の「方言」とケルト諸語とのとても大きな違いですよね。だからこそ、それは「方言」であるということになるんでしょうけど。

実を申しますと、このシンポジウムを企画したときにも、まず危惧したのが全体の話が言語に傾きすぎるかもしれないということだったんです。そうなると、鹿児島などはそういう状況とかなり隔たりがあるので、聞いている皆さんが当惑される

だろう、と。ですから、できるだけ言語の話は抑えてほしいとあらかじめみなさんに申し上げていたのですが、それでもやっぱりこういう流れになってしまうんですね。まあ、これは逆に言えば、言語の問題がいかに彼らにとって大きな問題であるかということでもあるわけですが。

それで、このシンポジウムでは、できれば、言語よりは、町おこしのような話を中心にしてみたいと考えていたわけですが、それもなかなか映像を通してだと伝わりにくいし、議論になりにくい面がある。ですので、ここで少しこれまで抑えてきた言語の話題に触れてみたいのですが。どなたかに日本の言語事情についてちょっと話していただけませんか。つまり日本も負けず劣らず複雑であるということで。たとえば平嶺さんのいらっしゃる甑島もそうですけど。ここにいらっしゃる方のなかでは木部さんがそういうことについて一番詳しいと思うのですが、いかがでしょうか。

木部———言語の話は、もういいんじゃないですか。

梁川———甑島については、本当は、平嶺さんに話していただきたいのですが。例えば私は長年奄美の調査をやっているんですけども、あそこも集落によって全然方言が違って、山一つ越えるとまったく通じなくなるので、育った集落が違う二人が夫婦になると、お互いの方言で話していてもまったくわからないので、仕方ないから標準日本語で話すということになる。私はうかつにもそういうのは奄美独自の問題かと思っていたら、どっこい甑島もまったく同じで、山越えて向こうの村に行ったらまったく違うということらしいですよね。

平嶺———そうですね。甑島にも島流しにあって平家が流れてきたり、さまざまな外部から入ってきた文化・歴史があるので、それぞれの集落でどうしても言葉が若干違ったりします。本当は僕も鹿児島弁で話したいんですけれども、鹿児島市内の高校に行っているので、標準語と鹿児島弁が僕のなかでは同じような感じです。自分のアイデンティティをつぶして話さなきゃいけないというか、伝わるというように話さなきゃいけないというか、島の言葉で話しちゃうと、どうしても皆さんに伝わらないということもありますし、島のなかでもやっぱり違いますので、そこらへんは木部先生の方がいろいろ調査もされていて。

木部———日本の方言の話を少ししますと、日本の方言は非常にバリエーションが豊富です。大きくは奄美・琉球方言とそれより北側の日本の方言に分かれるんですけれども、またそのなかのバリエーションが非常に豊富です。

なぜこんなにバリエーションが豊富になったのかということが、私の研究テーマ

なのですが、先ほど梁川さんもおっしゃいましたように、方言は文字で書くという習慣がありません。方言の上に文字で書く共通語、標準語というものがかぶさっているという二重構造を描いています。奄美・琉球方言はちょっと事情が違うんですけれども、現在はやはり同じように、日常の話し言葉が方言であって、文字で書く言葉は上に乗っかっている現代標準日本語だという状態です。文字を持たないということが、方言のバリエーションが豊富である原因だと思います。

そういう状態ですので、ヨーロッパとは少し事情が違うと思いますが、そのなかでやはり多様性、ダイバーシティは守っていかなければいけないと訴え続けています。

原———このシンポジウムを企画するにあたって、私と梁川さんで話をしました。つまり、こうした言葉の問題に深入りしたら、本当にそちらに引っ張られてしまうので、それとは別の角度で、文化のバイタリティにつながるようなところを見つけていく、それが重要ではないかということです。

僕の発言のなかで、スコットランドとブルターニュの話を出して、方言運動というか、方言地域とケルト語圏とを比べると、やはりケルト語圏のほうが圧倒的に文化運動が強い。それは違いが大きいからということを言いましたけれども、本当にそうなのかということですね。そこを僕は議論できればと思います。

そうするとまた言語の違いに話がいって、ケルト語というか、要するに違う言語であるから文化が盛んだという説明になってしまいますが、そうではなくて、ケルト語圏には連帯の歴史があり、それは国家に守られていない、だから自分たちでつくるという伝統があった。だから、それが逆に創造性につながっているというところがあるのではないかと思います。

梁川———これはお配りしたパンフレットの趣旨説明にも書いたことですけれど、ケルトというのはアイルランドを除けば、すべてイギリスやフランスといった国民国家のなかの一地域なんですね。その地域同士が連帯して、国を超えたトランスナショナルな形で結びついているところが、学問分野としての魅力なんですよね。西洋を対象にした学問をやっていると、知らないうちにフランスだのイタリアだの何だのという、国民国家の枠のなかにどうしても捉われてしまうんですけれども、ケルトという括りでやっていると、英語もフランス語もケルト語も、いろんなものができるということで、われわれのような無節操な人間にとっては、それが非常におもしろい。

だからやっぱり、先ほど安藤さんもおっしゃっておられたように、地方というの

は、当然ながら中央から遠く離れているがゆえに「地方」なわけですよね。離れているということにかけてはケルトも相当なもので、国という大きな枠組みのなかで見たら、いつまでたっても〈辺境〉なので、とりあえずは辺境同士、周縁同士の連帯ということを考えるわけです。それは本来とても自然なことだと思うんですよ。先ほど安藤さんがブルターニュとの比較で触れていたこともそうなんですけど、私がケルト諸地域と鹿児島との地形上の類似ということを強調したのも、やはり、まずは学生のみなさんに一つ問題提供したかったというのがあるんですね。たとえば、学生時代にロサンゼルスやパリやロンドンに行く。それは、もちろん鹿児島から行くわけですから、すごいなって思いますよね。で、帰ってきて「外国ってやっぱりすごい」と。でも、それはふだん住んでいるところと全然違うところに行くわけだから、東京だろうが、ニューヨークだろうが、都会であればそれはすごいと思うのは当然なわけです。もちろんそれは全然悪いことではなくて、それはそれでいいのだけれども、そういう経験を経た後に、今度は異国というものを、自分が住んでいる土地との共通性という観点から掘り下げてみる。すると、地方にだって都会とは違った意味で、すごくおもしろいところが山ほどあるということに気づくはずなんです。それはもう、本当に、無数と言っていいくらいあるはずなんですよ。ですから、私は学生のみなさんに、ぜひ、そういう発見をしてほしい。ここで取り上げたケルトというトピックも、そのひとつのきっかけになってくれればというつもりで提起したんですけれども。

これは海外から日本に来る人にも言えることで、いまはインターネット時代ということもあって、昔とは違う、いろいろな新しい動きがあるように思います。ひと昔まえは、日本でも外国から来た人というのは、どうしても中央に、東京に集まってしまった。私のように地方にいる人間は、彼らにわざわざ中央まで会いに行くというのが当然だったわけですけれども、今は、そうでもない。例えば今日の講演者にも、アイルランドの方がいらっしゃいますが、先日、奄美の観光業者のサイトを見ていたら、奄美はアイルランドからの旅行者がとても多いと書いてあるのですね。アイルランド人は、観光で日本に来ても、すぐに奄美や沖縄に行きたがるらしいんです。その観光業者には一月に一組程度、アイルランドの新婚カップルが来ると書いてありました。それはブルターニュの人もそうなんですね。私が知る限り、彼らのなかには日本に来ると沖縄に行く人がとても多い。なかには京都には行ったことがないけれど、沖縄には行ったことがあるという人までいる。ついでに言えば、ブルターニュの大学で、沖縄の大学と姉妹校になっているところもありま

す。こうした例を見て言えるのは、たぶん外国旅行についても、地域から地域へという発想の転換が起こっているということじゃないかと思うんですね。おそらくこれからは、外国とのお付き合いにおいても、地域同士の、地域と地域のお付き合いというのが、とても重要になるんじゃないかと思います。なにか問題が起きた場合でも、それをすぐに国家に、中央に投げるんじゃなくて、似たような立場の地域同士で、「おたくの国どうですか」「うちの国こうですよ」という感じで対話をすることができるんじゃないか、そういうふうにやっていければ、おもしろいんじゃないかと思うんです。これは今までもいろんな人に、平嶺さんにも安藤さんにもそういう話をしたのですが、どなたからも否定されなかった。ぜひそういうのをやりたいなって、みなさん同意してくださいます。まあ、ヨーロッパ・アメリカ文化コース主催のシンポジウムということなので、特にそういう外国との交流、付き合い方の新しい形の模索ということで強調しておきたいと思うのですけれど。

えーと、少ししゃべりすぎていますね。どなたでもけっこうですので、意見があればどんどんおっしゃっていただきたいんですけれども。たぶん、私などよりもずっと地域文化振興について深く考えていらして、すでに実践していらっしゃるという方もたくさんいらっしゃると思うんですけれども。あるいは、言語の問題という観点からでもけっこうですが。どなたか発言なさりたい方はいらっしゃいませんか。

「ケルト」とは？

会場 1———木部さんとヒックス先生のお二人におうかがいしたいです。

まず、木部さんへの質問ですが、日本の言語学者の、日本の言語学のとらえ方として、さっき方言と言語の話が出ましたけど、先頃亡くなった加藤周一さんが、日本こそクレオール文化の最たるものであると言っております。ウラル・アルタイ語族からポリネシアからアイヌ、イヌイットまで、日本は多様な言語を集約して、それが辺境に残ったり、島嶼に残ったりしている。これ、単なる大和言葉が変質して辺境や島嶼にあるというだけでなくて、多様な世界の言語が日本列島にあるということです。まずその認識がおありかということなのですが。

そこでケルトの話なんですが、数年前にNHKの紅白でエンヤの歌が現地中継で流されました。私はそのとき、エンヤがなんでNHKでアイルランドから日本にメッセージを送るんだろうと、その意味を考えたんですよ。

そこで思うのですが、ケルトの文化を辺境や島嶼にある文化とのみ解釈していいのだろうか。私はやっぱりヨーロッパ大陸の基層文化にあるのがケルトだというふうに信じたいわけですよ。

それでEUでは、先ほどヒックス先生がその問題を含めて、政策としてEU委員会でそういうことをとらえておられますよね。私はまさしくEUというのは経済圏のトラストじゃなくて、文化のトラストであると思うのです。そうなるとやはり基底にあるケルト文化まで遡るべきではないのかと。

だからヒックス先生から直接、EUにおける言語政策というのは何がきっかけになったか、動機になっているか、それを聞きたいわけです。

梁川———これは木部さんが先に発言されますか。

木部———これは大変難しい問題です。もちろんおっしゃるように日本語だけで完結しているということはあり得ません。そもそも大和の言葉というのがどうやって成立したかということも、いろんなことを考えていかなきゃいけません。大和語が成立する前にそこに人が住んでいたわけですから、そういう人たちがどういう言葉をしゃべっていたかということも考えなければいけない。それから大和語というものができたあと、一応標準語というか、中央語としての地位を確立すると、それが日本に広がりますけれども、その後で、もちろんいろんな接触を受けています。中国語からの影響も受けていますし、朝鮮半島を伝わって入った言葉もあるかもしれません。

比較言語学という分野がありますが、それは非常に純粋培養的な考え方をする学問の一つの形です。インド・ヨーロッパ言語だとか、アジアの言語の系統論だとか、それぞれのグループでどういう言葉が兄弟関係にあって、どういう言葉が近い関係にあるとか、そういうことを研究する学問です。言語変化のモデルを考える一つの学問として、そのような分野があります。

それ以外に、やっぱりどの文化もどの地域も孤立して存在しているということはあり得ないわけですから、常にいろんなところと接触し、いろんな影響を受けているわけで、そういう接触による文化交流、言語も含めて変化をするということも一つの考え方、一つの研究分野としてあります。それぞれの分野が言語変化のモデルとして、それぞれの説を立てているわけですが、実際に人々が住んでいる現場では、そういうことが複合的に起きているわけです。これでお答えになっているかどうかわかりませんけども。

原———僕もそれは一つの答え方だと思います。クレオール文化ですね。これに

ついては、ちょっと長くなるので話すのはやめておきますが、今話題にでた、ヨーロッパのケルトと基層文化の話をしておきます。

1991年にイタリアでケルト人に関する大展覧会がありました。それが引き金となって、90年代、ヨーロッパでケルトブームになり、それが日本にも波及するわけですが、そのときの副題は、ファースト・ヨーロピアン、最初のヨーロッパ人というものでした。つまり、まさにヨーロッパの基層はケルト文化であるという考え方を打ち出したわけですね。エンヤはそれにのっているわけです。ですので、NHKとしてもそういう位置づけで多分放送したのだと私は思います。ということではないでしょうか。

会場1———でもそれは、民放で流行っている歌だったから出したというだけのことだったらしいんですが、実は。でも、聞いた私たちは深読みして、そういうふうに意味づけたんです。

原———という意味づけもできると思います。

もう一つの問題にいきますね。ヒックスさんのような、コーンウォールという、非常にマイナーな言語をやっている人が、ヨーロッパの中心地であるブリュッセルで仕事をしているのです。

これは私の研究とも関係することですが、私が最初に日本で本を出したのが1990年です。それはブルターニュのケルト語の復興運動についての本ですが、そこの結論でどういうことを言っているかというと、経済がふるわないところは、文化を全面に出す、つまり敗北した経済は文化だということです。それは一つの逆説的な見方です。先ほどから僕の言っている手づくりの魅力というか、お金がなくても、補助金をあてにしなくても、自分たちはやっていけるのだという、そういうことです。

だから、僕にとってのケルトとは、そういう手作りの文化だったわけです。実際にこうした運動をやっている人たちが今日はいらしてるのですが、彼らはまさにそういうレベルでヨーロッパ的な少数派の連帯運動の中心にいるわけです。中心にいる少数派には主だったグループがいくつかあります。ケルトばかりではなくて、一つはスペインのバスクとカタルーニャです。もう一つはフリジアというオランダの地域ですが、やはりケルトというのは大きいです。ウェールズもあり、アイルランドもあり、ブルターニュもありということで、ヨーロッパの少数派の主だった運動家の半分近くはケルト系なのです。だからヒックスさんとか、ニヒネーデさんがこの運動の中心的な位置にいるわけです。そういうバックグラウンドがあるわけで

す。よろしいでしょうか。

ケルトと沖縄、そしてアイデンティティ

梁川――――ほかに質問はありませんか。

与那覇晶子（演劇批評 / 研究）――――沖縄から来ました与那覇と言います。

ケルトというとどうしても沖縄の場合とかなり呼応しているところがありまして、さっき木部先生が奄美・沖縄方言についてお話しされましたが、琉球諸語というかたちでユネスコでも独立言語として認められているわけですね。ですから、沖縄の場合はそのアイデンティティと言語と文化、その問題というのはものすごくシリアスなテーマです。

私は、原先生は前からご存じあげているのですが、鹿児島大学があえてケルト文化、文化圏の方々をお呼びして、ここでこういうシンポジウムを催したということをすばらしいなと思う一方で、なぜ沖縄ではできないのかと、すごく、じくじたる思いがしました。沖縄で、このようなシンポジウムが開催できたらと切に思います。

ケルト文化圏の方にお聞きしたいのは、アイデンティティの問題です。私の場合、沖縄に住んでいて、やっぱり沖縄人としての意識を持っているのです。ストレートに日本人ではないのですね。若いころアメリカに留学したのですが、ナショナリティを聞かれると、ジャパニーズというよりオキナワン・ジャパニーズと答えたりしていました。そこで、皆さんのナショナル・アイデンティティ、ドミナント・ナショナル・アイデンティティと、カルチャーに対する、そのマイノリティとしてのアイデンティティと、エスニック・アイデンティティはどういうふうに他者に対して話されているのかという点をお聞きしたいというのが一点です。

鹿児島の場合は、私がやはり興味をもつのは、奄美です。奄美に関して文化人類学の本を読むと、奄美列島の方々のアイデンティティ・コンプレクシティというのが複雑ということが感じられます。

そこで鹿児島と沖縄のいきさつというのは、1609 年から 1879 年の廃藩置県の時まで琉球王府は、いわば薩摩の植民地のような立場だったわけで、そこにトラウマがなかったとは言えません。一昨年は薩摩による奄美・琉球侵攻から 400 年という事で、多様な催しがいっぱいありました。

その辺の、奄美と鹿児島の島に住んでいる方々のコンプレクシティと、多様な言

語があるはずだけれども、それが浮かび上がってきません。さきほどの平嶺さんのお話のなかで一部離島の方言との葛藤を感じたのですが、その前の言語とアイデンティティという場合に、鹿児島の皆さんが、皆さん地元の方かどうかわからないのですが、すごく私にはあいまいに聞こえたのです。地域復興という面では、この試み、安藤先生や平嶺先生の事例というのはとてもパワフルで、ケルトの方々にも通じるものがあるなと感心しました。

ただ、言語に関しては、沖縄は今必死に、やっぱり独立言語として闘っているさなかで、やはり文化的アイデンティティもそうなのですが、何かその辺がちょっと皆さんのなかから、「鹿児島独特の何かが本当にあるのか」というのが迫ってきません。その辺が残念です。

梁川――――まさに痛いところを突かれたと思います。

まず、すばらしいと言ってくださってありがとうございます。で、どうして沖縄ではなく鹿児島でということですけれど、それは単純な話ですけれど、たまたまお金がとれたからですね、文科省から。それで、ヨーロッパ・アメリカ文化コースとして何をやろうかということになって、うちでは英語、ドイツ語、フランス語が学生の学ぶ言語なので、まずそうした言語を全部話すような方々をお呼びする催しをというのが最初に条件としてありました。英語だけとか、フランス語だけとかいうのはちょっとまずいので。その場合、「ケルト」というのは口実としてすごくよかったというのがまずありますね。まあ、そのときたまたまコース主任であったのが、ケルトが専門の私であったということもありますが。まあ、その程度の理由なので、あまり大きく考えないでください。

それで、ご質問の点ですが、確かに鹿児島は言葉の点でも、アイデンティティの点でも難しいと思います。これは鹿児島の方のなかには反対なさる方もいるかもしれないですけど、ここはやっぱり〈辺境〉なんですね。これはまぎれもない〈辺境〉なんですけれども。まあ、こういうことを言ったら、たぶん怒る方もいらっしゃると思いますが。でも別にけんかを売っているわけじゃないので許してくださいね。要するに、鹿児島というのは〈辺境〉なんだけれども、自分よりもさらに〈辺境〉であるところを支配してしまった、あるいはいじめた歴史を持つ。

しかも辺境であるのに、アイデンティティとして実は中央に人材を輩出している強烈な自負がある。ですから鹿児島の人で〈辺境〉と言われて、素直に「うん」と言う方はそこそこいらっしゃると思いますけれども、その一方でどこか「そんなことはないだろう」という思いもあるにちがいないんです。

だから、〈辺境〉にいながら中央に人材を輩出しているということを、自らのアイデンティティの核としてすごく自慢する。けれども一方では、自分も辺境なのにさらなる辺境をいじめた歴史を持つ。けっこう複雑なんですよね。だからケルトと何の関係があるんだと言われれば、たしかにその通りでしょうね。これがずっといじめられているところだったら、たぶんぴたりと一致するんだと思いますが。「僕たちいじめられたね」「本当だね」「あなたも大変ね」という感じですぐに肩を組めるんだろうと思います。鹿児島はいじめられていないんですね。むしろ、いじめた、と。ただ、考えようによっては今ならいじめられていると言えるのかもしれないですね。あるいは、明治維新のときも、自らまな板の上の鯉になって、「いじめて」と。あるいは「いじめてもいいですよ」というふうに自ら身を差し出したというふうに解釈できるかもしれませんが。

すみません、たとえ話が多くて。ですから、たしかにおっしゃるように、これが沖縄だったらもっとシンプルに盛り上がると思います。ですから、沖縄でもぜひ同様のシンポジウムをやってください。

ところで、ご質問のエスニック・アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティの問題ですが、今、通訳の最中ですが、どなたに答えていただけるのでしょうか。

メイリオン・プリス・ジョーンズ———ウェールズの場合でいうと、アイデンティティというのは「言語」で、先ほど「ケルト」というお話がありましたが、自分たちのことをケルト人ではなく、ウェールズ人だと考えています。こうしたアイデンティティは、特にこの30年の間に大変強くなっていて、昔はウェールズ語というと田舎の言葉だと嫌う人もいたのですが、今ではすっかり変わり、むしろそれを誇りに思って、ウェールズ語を話せない親たちで、子供をウェールズ語学校に通わせる例もどんどん増えています。

森野（通訳）———「ケルト」という言葉は、ある意味、非常に便利ですけれども、誤解を招く言葉なんです。私はウェールズをやっていますが、今、メイリオンさんが言われたみたいに、ウェールズ人は自分たちをケルトだというふうには定義しておりません。

では、どこにアイデンティティがあるのかというと、話しをするとまた長くなりますが、ブリテン島の本来の住民である、というのが彼らの一番古い定義なんです。自分たちのことをケルトということは、ほとんどありません。

それでは、自分たちを、同じ島に住むイングランド人やスコットランド人と区別

するものは何になるかといったら、ウェールズ語という違った言語、フィジカルな言語という存在なので、「ケルト」という同じ言葉でウェールズやスコットランドを語るというのはなかなか難しい、みんなそれぞれに違います。

ロバート・ダンバー――――スコットランドでは、何もかも非常に話が複雑です。確かに「ケルト」という言葉が、ブリテンの国家的政治という、より大きな問題にからめて使われる場合もあります。つまり、ブリテンのなかにおける、複数のアイデンティティの問題です。

スコットランドをケルトの国だという意味は、ケルト語であるガーリックが、いまだに話されている、何百年も前には大部分の地域で話されていたということによります。けれども、言語的には分裂状態でした。なぜならな、イングランド人の隣で暮らすことで、スコッツ（英語の方言の一種）がより支配的な言語だったからです。中世の大半、そして17世紀を経て1707年のイングランドとスコットランドの王権と議会の統合に至るまでそうでした。統合以降は、英語が支配的になりました。しかしながら、どちらも結局はゲルマン語です。高地地方と低地地方というスコットランドの両半分は、中世以来お互いを異なる存在と見なしていましたが、ある種の統一意識もあったといえます。

イングランドとの統合以前はというと、中世においては、スコットランドのケルト語、あるいはガーリック語地域に対する敵対心というものがありました。にもかかわらず、低地地方のスコッツ語話者は高地地方のハイランダーズこそ、この国の本当の祖先であると考えていました。中世のスコッツ語の詩やほかの資料からは、かつては、スコットランドの国の言葉とは高地地方で話されている言語のみである、高地地方の野蛮なケルト人たちの言語であるとされていたことがわかります。

イングランドとの統合以後になると、支配的人々が、低地地方のスコッツ語はアングロ・サクソン、つまり英語と同じゲルマン語だと主張するようになります。この点は、19世紀、そして20世紀に入ってからも強調されました。皮肉なことに、今日、低地地方の人々は、しばしば自分たちを「ケルト」と自称します。これは統合とは正反対の考え方です。低地地方の大勢の人々が、ブリテン帝国から少し距離を感じ始めており、かつては、そこに参加したいと思っていたのに、今では、もっとスコットランド人としての意識を持ちたがっているのです。スコットランドをケルト地域と呼ぶことが、どんどん増えてきています。

梁川――――もうおわかりのように、アイデンティティというのはケルトの方々にとってツボなんですよね。でもこのアイデンティティという言葉は日本語では片仮

名なんですよね。つまり、なかなかうまく訳せない。ですから、このアイデンティティの問題というのは確かに彼らにとってはすごく重要なのだけれど、それは日本人にとっては片仮名を通してしか論じられない問題なんですよね。要するに実感としてどうもよくわからない。でもこういう微妙な違いというか、そういう話が合わないところがやっぱり異文化交流なんで、これひとつとってみても、異文化交流というのはそんなに簡単じゃない、というのがよくわかると思います。

ところで、地域おこしの方で素晴らしいゲストをお招きしているので、お二人に質問はございませんか。簡単な質問でもいいですので。

「町おこし」と先立つもの

会場2———こんにちは。

実際に地域文化振興のために何かをするとなったときに、先ほどヒックスさんも、税制とかをコントロールできなきゃいけないとかおっしゃっていましたけど、やはり、お金をどんなふうに苦労されたかという問題があると思うんです。その具体的な話をお二人から聞きたいのと、また各国の方々が、どうやって自分の国じゃないところからお金をひっぱってきたのかとか、何か少しでもいいのでその国なりのお話とか聞けたらと思うのですが。

梁川———ありがとうございます。その前に、ちょっと私の方からひとこと言わせてください。さっきの原さんの話じゃないですけど、文化振興を見ていてはっきりわかるのは、「世の中、金じゃない」ということなんです。世の中、金じゃない、「心意気」だと。金がないと言っているうちは、ちょっとまずい。この人と一緒に仕事をしたらおもしろいとか、まずそれがないと地域文化振興というのは成り立たないのではないか。甘いと言われるかもしれないですけど。やっぱり組織でも、この社長のもとだったらおれはいくら貧乏してもついていくとか、こいつと一緒に仕事をしたらおもしろいとか、そういうのがあると会社が伸びるのと同じで。おまえに頼まれたんだからやるよというのが、やっぱり一番の基本じゃないか。最近は学校でも、教育でも、政治でも、何かつまらなくなっているのは、そういうエネルギーの根本みたいなところをきちんと強調しないで、金を渡せば子供をつくる、金をわたせば何とかなるみたいな、ロマンもへったくれもないところに話が落ち着くからではないか。大学もそうなんですけど。もちろんこのシンポもお金があって成り立っているわけですが、そうであっても、そのなかでこういう傾向を批判するの

は大切だと思うので言うのですけれど。もちろん、今のご質問はすごく大切なことので、さっそくお話をうかがってみますが。

会場2———お金というか、やはり、その、どういう形で助けてくれたとか、やっぱりそこだと思うんですよ。やっぱりお金イコール人だと思うんですよ。何かそういうエピソードとか、国によって違うということがあればうかがいたいのですが。

梁川———はい、わかります。

平嶺———最初は、2004年の段階で、もうみんなアーティストの持ち出しでやりました。全部、交通費から何から、全部自分たちで、僕の思いや、自分たちが表現の場所を求めていくという、その気持ちだけでみんな交通費、宿泊費等、自腹で、出し合いました。僕もやれることはやろうと、当時、スカイマークが東京から鹿児島まで出ていたので、知り合いの方を通して企業に頼んで航空券を安くしていただいたり、いろいろそういう活動をしていきながら、役場にも、当時はまだ合併していないので、里村なんですけど、370万ほど経費がかかるということを、毎年、申請していきました。そのかいもあって、合併して出来た薩摩川内市が、大学生たちが甑島で研究や調査のために活動する動きに補助金をだす制度をつくってくれました。それから少しずつ薩摩川内市もその手ごたえですとか、いろんな流れで、今は、補助金として薩摩川内市から支援を受けながらやっています。

そのほか、アサヒビール芸術文化財団の助成など、最近では、新たに企業が積極的にそういう文化活動に助成等を通して応援する流れが増えてきているように思います。

安藤———豊後高田の方も、基本的にはボランティアです。30年近く続いている二つのイベントがあります。まず「大分方言丸出し弁論大会」。これは当初、メジャーな企業にお願いをしました。サントリーでしたか。途中から、もうやはり手づくりを続けようよということでお断りしました。それが結果的によかったんだろうと思うのですが、今、また二、三のオファーが入っております。20人から30人のメンバーで、みんなで会場設営から何からやっておりまして、300人から500人規模のイベントをやっております。

それから、「大松明秋祭り」というのをやっていますが、これはもともとは1200年来のお祭りなんですが、これも手づくりです。のべ30日間ぐらいかけて、17、8メートルの松明をつくるのですが、これは商工会議所の青年部とか有志たちによって、すべてボランティアで作られます。これをカウントしますと、やっぱり

5、600万円ぐらいにはなるでしょうね。夕方の5時過ぎから、のべ300人規模のメンバーでやっております。

それから建築の「国東セミナー」。これは私が主軸でやっておりまして、基本的にはうちの事務所の、すべて出資ということで、あとは協賛していただいて、ちょっと今3年ほど休んでおりますが、また再開しようと思っております。基本的には、やっぱりそうした心意気みたいなものでしか皆さんはついてきてくれないなという感じはします。

ただ、「昭和の町」の展開に関しては、実は、ありがたいのですが、若干迷惑なところもあるんですが、いろんな賞をいただきます。サントリー賞とか、それからファッション大賞とか、いろんな国レベルの賞をいただきまして、100万、200万単位の金がどんどんいただける状況であります。でも、これはどうもまずいなということで、少しスタンスを変えなければいけないかなということが、先ほどの地球レベルで地域間交流をしながら、もう少し異国の町と町との交流をして、そういった国際的な人的交流のなかでやっぱり続けていくべきだろうなというふうに考えています。

梁川———ありがとうございます。

お金の話というのは、実はとても大切なんですけれども、なかなか直接質問するのはためらわれるような事柄ですので、ご質問をいただいてとても助かりました。ありがとうございます。

今お話しいただいたように、安藤さんも平嶺さんも、とても熱い方なんですよね。僕が惹かれたのも、やっぱりそこなんですけれども。しかも、いまお話ししていただいたのはごく一部で、たとえば安藤さんは「昭和の町」以外にもいろんなイベントをやっています。で、お話を聞くと、全部自腹を切っているんですね。金額を聞くと、一桁違うんじゃないかっていうような金額で、私など思わず「大丈夫ですか」と聞きたくなるのですけれども。たとえば一流の建築家を招いて、九州一円の建築家を集めて勉強会を開くというようなことを、本当に自腹でやっているんですね。

これは本当にすばらしいと思うし、林太郎さんのプロジェクトも、これは林太郎さんにも言ったんですけど、私が最初にそのチラシを見たときに、誤植に一枚一枚小さい紙を切って貼りつけているんですよ。最初にそれを見たときには、普通は、こんなの一枚一枚貼らないだろうと思って。それが「これは応援したい」「行きたい」と思ったきっかけなんです。こういうのって、やっぱり、みんながそのプロ

ジェクトを大切に思っていなければできないことですから。そういうところは、私も気をつけないといけないなと思いますけれど。そういう本当に細かいところを、感知する人は感知するわけですから。もっとほかに、お二人にご質問があれば。

今日の「ケルト」が目指すこと

会場1———さっきのヒックス先生への質問の答えがまだですが。

ヒックス　ごめんなさい、ご質問がうまく伝わらなかったもので、もう一度質問をお願いします。

会場1———この案内にあるようにプロフィールに、ヒックスさんのお仕事が、現在EUの将来の言語政策を検討するために設立された欧州委員会のNGO、多言語使用政治機構の言語政策・計画に関するサブグループの議長ですよね。この立場でお聞きしています。

ケルト文化というのはマイノリティとか辺境とか島嶼ということもあるのかもしれないが、それは大昔からヨーロッパ大陸に基層文化として漂っているんじゃないか。それがくしくも今、EUという形で発展の可能性を見出しているのではないかと。

だから、ヒックスさんの役割というのは、言語の立場からヨーロッパを一つにしようということではないのか。そういうところに新しい枠組み、パラダイムが予想されているのではないか。そのことがあるかないかをちょっと聞きたかったんです。

ヒックス———翻訳に手間取ってしまいましたが、やっとご質問に答えさせていただきます。おっしゃるように、もしローマ以前に西ヨーロッパで使われていたようなケルト語を取り戻せたら素晴らしいですね。遠い過去ですけれども、確かにおっしゃるように、ヨーロッパの基層の言語としてケルト語というものはあって、例えば、それは地名などにも証拠として確かに残っていることです。オーストリアのウィーンはケルト語の聖なる色である「白」を意味する「ヴィンド」(vindo-)が語源になっていますし、イタリアのミラノも、ケルト人の都市メディオラーヌムが起源です。同じくイタリアのトレヴィソの語源も、ケルト語で「雄牛」を意味する「タルヴォス」(tarvos)で、このようにヨーロッパ各地にケルト語が地名として残っています。

今、私はユーロラングというNGOで仕事をしていますが、これはヨーロッパの

各国に存在するすべての少数言語の利益をはかる機関です。ケルト諸語について言えば、みなそれぞれ国の言葉（national language）と見なされていると思います。「地域少数言語」というのはあまりいい言い方でないかもしれませんが、ユーロラングというNGOは、ヨーロッパのすべての地域少数言語を奨励し、それらが認知され、使用され、将来を持てることを目指して仕事をしています。それが私の仕事です。政策決定が出来ればいいとは思いますが、私がやっているのは、政策決定に微力ながら影響力を及ぼし、地域少数言語の多くが将来を持てるような方向へと導くよう努力することです。それぞれの言語がヨーロッパの言語的多様性に貢献するために働いているのであって、かつてのヨーロッパの基層言語としてのケルト語のような、ヨーロッパを統合する言語を目指すというのとは方向性が違います。大切なのは多様な言語を大事に育てていくということなのです。これでご質問の答えになればいいのですが。よい質問をしてくださってありがとうございます。

梁川――――ありがとうございました。

次世代のために

遠藤晃（南九州大学）――――今、私は沖縄の離島の小さな僻地の学校で、そういうところにこそ学校教育の理想みたいなのが残っているんじゃないかと思って、そういうところで小学校にかかわっています。

地域文化振興という点から、次世代を育てていくということは、今日のケルトの方たちの話にもありましたが、先ほどの平嶺さんの話のなかで、高校生、中学生がかかわってきているというふうな話があったんですけど、安藤さんも含めてお二人に、地域の次世代にこういう試みが何かプラスの影響といいますか、そういうものが見えてきているかということをちょっとお聞かせ願えればと思います。

安藤――――本職は建築家でして、非常に、タイムリーな質問でありがたいのですが、今、核家族化していく日本のなかで、非常に無国籍的な建築がどんどんできている。たぶん沖縄でも、大分でもそうなんですね。これは、やっぱり今の世代の、日本の若い世代の方たちのいわゆる流れなんです。ゆとり教育のなかで生まれた方たち、あるいはゆとり教育をしてきたお父さん、お母さんたちのなかで、やはりおじいちゃん、おばあちゃんとの家庭とのかかわりあいが、ほとんど切られていっている。その原因の一つは、住宅のつくられ方にあるというふうに思っております。この住宅というものが、昔、おじいちゃん、おばあちゃんがいて、孫がいて、そし

ていろんな形で継承されていった、それが継承されていくような木造軸組工法の住宅づくりだったのが、今、新たに無国籍的なプレハブ住宅が、どこかのメーカーが車で運んできて、とんと置くような形で家がセットされていくという状況が、沖縄でも、福岡でも、鹿児島でも、大分でもあるというのが現状です。

昨年全国20ヶ所で環境省主催のコンペがありまして、その作品を豊後高田、国東半島の村の真ん中に木造住宅でつくりました。これはまさに三世代住宅です。こういった、在来の日本における一番大事な伝統文化みたいなものをもう一度創造し、あるいは掘り起こしてやっていくということは、われわれの責任であると思います。あるいはユーザーたちに対して啓発していく義務もあるのだろうと思っています。

平嶺———甑島の場合は、それぞれのファミリーで違うと思うんですけど、僕自身は島に帰ってきて、何かをやるような教育を父からずっと受けてきたので、今は夏のある一定の期間、帰って活動をする形なんですが、今の小学校や中学校の世代になると、もう島に仕事がないので、帰って来ることは難しいというような教育をしているようでした。KOSHIKI ART PROJECTをやり始めてから、島の人たちが、甑島でも何かできるんじゃないかというような流れが少しずつ生まれてきて、実際、僕らの世代が自分の夢や目標を持って帰って仕事をしています。若い人たちが島で夢を持って生きてく方法論を模索し始めたというのは、すごく、今後どうなるかなという期待があります。

梁川———林太郎さんはよく中学校とか地元に呼ばれたりしてるんですよね。

平嶺———そうです、つい最近、母校の中学校で、自分がどういうふうに島で育って、今、こんな活動をしているということを話してきました。そこで中学生に、「この島に戻ってくる人？」という質問をしたところ、2割が手を挙げました。先生方は思った以上に少なかったみたいでびっくりされていましたが、僕のなかでは少し多いくらいでした。実際、僕の同級生は18人なんですが、1割の2名が帰ったのが現状です。これから、このプロジェクトを通して、若い世代が島で夢や目標の持てる仕事を描けるために、実験的にいろんな試しを経験していけたらなと思っています。

安藤———もう一つ補足でいいですか。

先ほどから、いわゆる言葉とかアイデンティティとか、ちょっとわれわれにとっては難しい問題が出ているのですが、私なりに単純に考えてみました。日本の場合は、自分を示すときに、優しい言葉というか、あいまいな言葉で自己表現しようと

する。でも、他国といいますか日本以外のところは、自己主張、言葉というのは自己の意思をしっかりと相手に伝えるというところに何か違いがあるのかな。あいまいと言えばあいまいなんですが、そういう意味から言いまして、いわゆる私のまちづくりも、平嶺さんのいわゆるアートプロジェクトも、やっぱり芸術とか文化というところに視点を置いているわけで、これは世界共通の音だったり、世界共通の美術だったり、これはインターナショナルだと思うんです。「自己主張」ではなくて、「自己表現」というところで平嶺さんの「芸術」をどうしていったらいいのかなあ。自己表現という形で「まちづくり」をしていけたらいいのかなあ、というような思いを感じています。

そんな活動のなかでは、いろんな手法があると思いますが、やはり、あまり言葉ということに入っていってしまいますと、どうも日本と外国の壁が、どんどんどんどん、でき上がっていってしまうのかなという感じがいたしました。

梁川――――あと少し時間があるのですが……。実は会場に林太郎さんのお姉さんがいらしています。突然で申し訳ありませんが、ひと言いただけたら嬉しいのですが。

平嶺純子――――すみません、甑島からやってまいりました。まさか逆指名がくると思わなかったのでびっくりしています。平嶺林太郎の姉です。

先ほどの沖縄の方のご質問で、具体的な事例をお聞きしたいんじゃないかなと思ったので、つけ加えさせていただくと、KOSHIKI ART PROJECT が始まって今年で 8 年目になるのですが、最初は島のおじさんたちから、若い大学生たちが、アーティストなので、男なのに髪が長い人もいれば、女性はタンクトップを着て夏を楽しんでいたりして、そういった若者たちが子供たちに対して何か悪さを教えるのではないかと心配されました。

それで周りがとても警戒して、大人の人たちはちょっと遠くから見ていたんですが、そこに純粋に飛び込んでくるのはやっぱり子供たちで、アーティストが制作をしているところに駆け寄ってきて、「何をしているの」と声をかけるところからいろんなことが始まり「こういった道具が足りない」と言うと、「じゃあ、おじいちゃんに借りてきてあげる」と言って大人たちとのつなぎをしてくれたわけですね。

最初のころは写真でも流したように、子供たちを集めてワークショップを企画していました。それが 5 年目を過ぎたころ、子供たちは放っておいてもアーティストに集まるので、もうワークショップはしなくてもいいんじゃないか、その自然発

生的に起こることをワークショップととらえて、子供たちを自由に伸ばしてあげようというような形で、今はプロジェクトを進めています。

そうしたところに、プロジェクトを始めたころには小学生だった子供たちが中学生になり、島を離れて高校へ行き、夏のあいだ帰って来て、プロジェクトの参加者たちの制作の様子をずっと見ているんですね。なかには「何か手伝いたい」と言って、1カ月間まるまる手伝いをしてくれたり、実際に芸術方面の高校に進学した子もいます。このアートプロジェクトがきっかけになって、そういう子が何人かいるんですよ。今、ほかの地域にもエリアを延ばしたので、ほかの地域の若者にも協力していただいています。私自身も昨年、このプロジェクトがきっかけで島に戻りました。いとこも戻って、今、東京と甑島とでやりとりをしながら、このプロジェクトを進めています。昨年の夏にも、隣町の集落の女の子が「プロジェクトを手伝いたい」ということで1カ月手伝ったところ、結局、「やっぱり島に戻ろう。島でこの人たちと一緒にやっていこう」と言ってくれました。今、だんだんとそういうふうに、Uターンしてくれる若者たちが増えてきているというのが現状です。

梁川――――ありがとうございました。いや、すばらしいなと思うと同時に、逆に責任も重大なんだなという気もします。

ほかに質問があればあと一つぐらい。ありませんかね。

それでは、本当に長い時間おつき合いくださりありがとうございました。